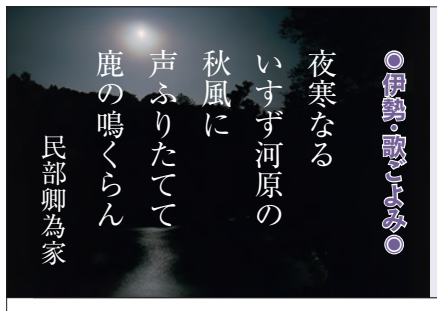


○伊勢・歌よみ○

夜寒なる
いすず河原の
秋風に
声ふりたてて
鹿の鳴くらん

民部卿為家

学園報
皇學館
第23号

発行・編集：学校法人皇學館（総務課）
TEL0596・22・6308
伊勢学舎［法人本部・大学院・専攻科・文学部・教育学部］
〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704番地
TEL0596・22・0201㈹　FAX0596・27・1704
名張学舎［大学院・社会福祉学部］
〒518-0498 三重県名張市春日丘7番町1番地
TEL0595・61・3351㈹　FAX0595・61・3350
高等学校・中学校　三重県伊勢市楠部町138
【高校】〒516-8577　TEL0596・22・0205㈹
【中学】〒516-8588　TEL0596・23・1398㈹

●今号の注目記事

1面
「現代日本社会学部」開設記念教育講演会
歴史教育の重要性を語る

2面
現代日本社会学部
担当教員に聞く

3面
「雅」がよさこい全国大会で
優秀賞

4・5面　学生責任編集ページ
皇名祭（名張）・倉陵祭（伊勢）特集

6面　高校・中学
修学旅行、体育大会 など

8面
学園祭に著名人が続々来学

●連載

2面
皇學館人物列伝④
原田敏明

3面
リレーエッセイ　私の学生時代
河野　訓（神道学科教授）

8面
皇學館ミュージアム
徳川家康　御内書

「現代日本社会学部」開設記念教育講演会

歴史教育の重要性を語る

講師●山口昌紀（まさのり）氏（近畿日本鉄道株式会社　代表取締役会長）

現代日本社会学部開設を記念した教育講演会が十一月十四日、四日市都ホテルにて開催された。講師は近畿日本鉄道株式会社代表取締役会長の山口昌紀氏。壇上に立った山口氏は会場を埋め尽くしたおよそ三百名の聴衆を前に「日本の歴史・文化を未来に繋ぐために」との演題で熱く語り、神話や日本の歴史・伝統文化を伝える教育の重要性を説いた。

山口氏は奈良県生まれ。京都大学法学部卒業後、近畿日本鉄道株式会社に入社。以降、要職を歴任し、現在は代表取締役会長。神職の資格も持つ。

〈神話教育〉で日本人の原点を伝える

講演会当日は朝から降っていた雨がすっきり上がり、青空のぞく晴れやかな天候となった。講演が始まったのは午後二時。伴五十嗣郎学長、宮川泰夫現代日本社会学部長（予定）の挨拶に続き壇上に立った山口昌紀氏は「日本の歴史・文化を未来に繋ぐために」との演題で講演を行った。

冒頭、近鉄沿線に四つの世界遺産があることに触れ、近鉄は沿線の歴史や文化とともに発展してきたと述べた山口氏。沿線で進められている「歴史街道計画」も、地域の観光振興策に留まらず、素晴らしい日本文化を内外へ発信することが本旨であると語った。そして、戦後教育が民族の歴史を伝える努力を怠ってきたことを省み、子どもたちに〈教えるべき事〉としてとりわけ神話教育の重要性について言及。自身が古事記に親しんだことで、国の成り立ちを考えるきっかけになったと語り、私たち日本人がどこから来てどのような国造りを行いどのような心性を培ってきたのか、神話にこそ日本人の原点が示されていると熱弁を振るった。

聴衆で埋め尽くされた会場。熱心にメモをとる姿も。

また、六十年ぶりに改正された新しい教育基本法において「伝統・文化の尊重」が盛り込まれたことを高く評価。自国を理解し、日本文化のアイデンティティーを守ることこそ、他国との相対的な関係を築くための基盤であると話した。

最後に本学の建学の精神、新学部の設立趣旨に深く共感していると締めくくり、伝統文化の継承に力をいれ、子ども達に伝えていってほしいと願いを述べた。

教育関係者など三百名が集う

会場には教育界の第一線で活躍している教育者をはじめ本学の卒業生、一般の方などおよそ三百名が集う盛況ぶり。セッティングスタッフが慌てて予備の椅子を並べる一幕もあった。

河邑政彦さん（上）と増田佳響さん。教育者をめざす上で心構えを伺いたいと来場の動機を語った。

来年、小学校の先生になることが決まっている本学教育学科四年の河邑（かわむら）政彦さんは「僕自身、大学に入って初めて神話や愛国心について学んだ。今日、神話教育の重要性を再認識したことで、自分が四年間で学んだことをどう子どもたちにフィードバックしていくかを考えたい」と教壇に立つのを前に大きな課題を与えられたと振り返った。

同四年の増田佳響（かなり）さんはまず聴衆の多さ、熱気に驚いた様子。そして、自国のことをわかって初めて他国と相対化できるという指摘に感銘を受けていた。また、「友達同士、教師と生徒など、人と人との間においても同じことが言えると思う。これからの学校生活や社会に出た際に役立てたい」と話していた。

中国の研究員を招き学術報告会を開催

社会福祉学部・国際交流事業

（日本学術振興会委託研究事業）

写真や統計を交え、報告ごとに活発なディスカッションが行われた。

九月十四日、名張学舎本部大会議室にて二国間交流事業・共同研究の一環である第四回日中学術報告会「アジア的福祉文化の地平を求めて～日本と中国の地域と家族の福祉課題について～」が行われた。

日本では初めての開催

この報告会は、本学社会福祉学部と中国社会科学院でそれぞれ行われてきた福祉文化研究をもとに、アジア的福祉文化とは何か、両国の研究者が提言を行うというもの。毎年行っていたが、日本での報告会の開催は今年がはじめてとなる。

社会福祉学部では、平成二十年より独立行政法人日本学術振興会から委託を受けて、日本と中国との国際交流事業・共同研究を行っている。

当日は、中国より五名の研究員、日本からは社会福祉学部教授ら八名が参加。

両国の〝地域と家族の福祉課題〟をテーマに据え、両機関で行われてきた福祉文化研究をもとに、市民活動レベルでの実践報告や行政主体の地域福祉計画活動の報告を行った。

両国共通の課題を認識

開会式の後、まず中国側の研究責任者・王偉（おうい）氏が「中国の人口発展と養老リスク」について報告。中国の人口発展に関わる現状と問題、人口政策を見直す議論を紹介した。日本からは、社会福祉学部の教授らが在宅高齢者の生活問題と家族の役割や、名張市・伊勢市それぞれの地域福祉計画の現状などを報告した。

両国の報告を通して「高齢化社会」「介護」「地域教育」の現状と現実的な課題を取り上げたものが多く、日本と中国が共通して直面する現代社会の福祉に関するテーマについて、参加者は質疑応答の場面でも活発な意見交換を繰り広げた。

また前日には名張市内で地域福祉活動の視察が行われた。

倉田山春秋

落ち葉を踏みしめて歩く。雨を含んだ錦の絨毯は、疲れた体にやさしい。十一月三日の伊勢神宮宇治橋渡り始めの式典のときには、今年の紅葉はすでに始まっていた。〈さまざまに錦ありけるみ山かな花見し嶺を時雨そめつつ　西行〉。桜の季節から、いま時雨の降るみ山の風景へと、自然の営みは確実に推移してゆく▼今年一年、私たちが体験した様々な事象は、いつか自らの行動や表現の源泉として甦ることがあるだろう。〈そのときどう動く〉。相田みつをの、素朴で枯れた文字を思い浮かべながら、この世に無駄なものは何一つ存在しないのではないかと、思えてくる▼そのとき、どう考え行動するか、人生の蓄積は、宝である。その意味で、古典や年長者の言辞に耳を傾けたい。古典とは、古いものを指すのではない。〈時を越えゆくものの姿なり〉とは、俳人・長谷川櫂の言葉である▼倉田山の桜と紅葉は、生きとし生けるものを魅了する。この空間は、まさに磁場として万象を引き寄せ、命を再生する場である。そして宇宙の中の地球もまた…。明年に繋がる今年を振り返りつつ、健やかな時の流れを祈りたい。

シリーズ 現代日本社会学部 担当教員に聞く Ⅰ

平成二十二年四月に誕生する「現代日本社会学部」。①政治・経済、②現代社会、③福祉計画・社会福祉、④伝統・文化の四つの分野について、それぞれの内容や特色を二回シリーズで担当教員に伺う。今号は①と②について話していただく。

政治・経済分野　新田均 教授

―政治・経済分野の特色は？

日本を個性ある一つの文明として理解したうえで、今現実に起こっている政治や経済の問題を認識・分析し、対処する能力を養います。そのため「政治学」「経済学」といった既存の学問の枠を超えて、実際に日本が直面している不況・食料・エネルギー・情報・安全保障など具体的な事例を取り上げ、それらの本質を見極め、解決するための技術を現場の声を聞く中でトータルに学んでいきます。

―将来は、どのような人材を？

日本の心・国柄を学び、政治・経済・経営の分野で、国民・国土・地域・世界のために活躍できる人材――具体的な職業でいえば、国や地方の政治経済分野に関与する公務員、それを報じるジャーナリスト、民間で活躍する企業家や交通・エネルギー・情報といった公共公益企業の職員などを想定しています。特に公務員、ジャーナリストを目指す学生には、名古屋・大阪などから業界一流の専門講師を招いて塾を開講し、就職をサポートする態勢を整えています。

現代社会分野　筒井琢磨 教授

―現代社会分野の特色は？

現代社会分野ではフィールドワークを重視し、現代社会が抱える課題を多彩な視点から調査・分析し、解決する能力を身につけます。

たとえば、本分野では四つのフィールドを設け、社会調査実習（データの集計・分析など）、産業社会実習（インターンシップとビジネスプランの作成など）、社会臨床実習（地域への参画など、社会情報実習（地域への情報発信など）を展開します。

一つの分野がさらに三つのコースに分かれるのも特徴です。フィールドワークにより現状課題を徹底的に学び地域のリーダーを養成する「地域社会コース」、地域社会の背景や構造的要因を深く理解し解決する力を修得する「社会臨床コース」、社会情報を駆使して原因究明にあたり情報発信する力を修得する「社会情報コース」があります。

―将来はどのような人材を？

四年間通して学んだことをビジネスや地方行政に展開できるセンスを持つ人材の育成を目指しています。具体的な進路としては、一般企業だけでなく、マスコミ、出版、地方国家公務員、各種団体職員、NPO職員などを想定しています。またこの分野では卒業後に社会調査士の資格取得も目指しています。

片山助教が日本体力医学会賞を受賞

五千二百余名の会員を擁し、体力・スポーツ医科学分野で国内最大規模を誇る「日本体力医学会」。その第六十四回学術大会において教育学部教育学科・片山靖富助教らの論文が、同学会の機関学術雑誌「体力科学」に掲載された原著論文約四十篇の中で最も優れているとして学会賞を受賞した。研究テーマは「運動介入期間中の日常生活における身体活動量の変化が活力年齢および体力年齢に及ぼす影響」。たとえば週三日の運動を三カ月続け、三㌔減量したとする。単純に考えると〈週三日×三カ月の運動量＝三㌔〉と思いがちだが、片山助教は運動日以外の行動にも着目。調査の結果、指定された運動日以外における対象者の身体活動量が増えており、減量や活力増進に影響していることがわかった。

「去年、一昨年と該当論文なしという厳しい審査なので、とても驚きました」と片山助教。学生には「出てきたデータを鵜呑みにしないこと」とし、「テレビなどで得た情報もすぐに信じるのではなく、本当に正しいのか自分の頭でしっかり考える癖をつけてほしい」と話す。

文学部・教育学部・専攻科

五百二十三名が山室山を参拝

澄み渡る晴天に恵まれた十一月四日、文・教育学部一年生と専攻科生あわせて五百二十三名が参加して、山室山参拝が実施された。この行事は例年、松阪市にある本居宣長翁奥墓を参拝するもので、当日は祭式研究部による墓前祭や応募作の中から選ばれた歌の献詠が行われた。その後、引率教員による講話がグループ別に行われた。

なお、当日献詠された歌は次のとおり。

厳粛な雰囲気の中、執り行われた墓前祭。

●教職員

皇國の道を学びて巣立ち行く若きら幸あれ雄々しくもあれ　佐古一洌

懸税供ふ神垣庭燎にほの白く映ゆ紙垂の畏さ　木村徳宏

●学生

山室の紅葉の如く降り積もる大人の御教我等の胸に　桐田篤史

神苑の若葉食む鹿耳高く拍手の音聞きて育たむ　前田紗奈江

秋の夜の清き虫の音聴き入らむ響く鈴の音かくのごときと　阿部見知子

おほかぜに吹かれみがかれゆく毎にいよいよ高く遠く澄む空　井関　葵

はたとせの御代ことほぎて行く先も大和島根は千代に八千代に　今井大介

いにしへの山室山の山桜朝日のごとくさはやかにあれ　落合直人

秋の日に白木まばゆし橋姫のもり吹き渡るいすず川風　皿海宏則

名月を眺めて過ごすひとときに季節を思ふ人生になりけり　鳥羽良明

秋月の夜空に浮かぶ清らかさ雲より出でて光放ちつ　三宅勝正

学舎の窓より望む山ざくらいつか行きたし奥墓の山　松田佳恵子

●選者

秋ふかし斎の皇女の願ひとも伊勢神宮に燈の揺れ初めて　半田美永

御先追ふ警蹕響く闇の中入り坐しぬらし神の御剣　本澤雅史

秋空に掛け声高く響かせて心一つに綱曳き奉る　大島信生

皇學館人物列伝 4

原田敏明

はらだ としあき

神道を通して日本社会の特質を究明
神宮皇學館大學における神道学の形成に寄与

はらだ としあき◆熊本県鹿本郡生。大正八年神宮皇學館本科（第二十六回）、昭和二年東京帝国大学文学部宗教学宗教史学科本科卒業。昭和十三年から二十一年まで神宮皇學館・神宮皇學館大學教授。宗教学・神道の研究を通じて日本社会の特質を究明した。一八九三～一九八三。

氏は、逝去に際して「原田先生は、われわれ同窓の中では安藤正次先生以来の大学者であった」（小島鉦作氏）と評された。（なお、安藤氏は本科第七回卒。国語学者・神宮皇學館教授・台北帝国大学総長。昭和二〇年、文部省国語審議会会長となり戦後の国語国字問題に尽力した。）

神宮皇學館を志望した理由は、明治天皇大喪に際会して、神社や神道を通じて日本という国・社会の特質を学びたいからだったと、お聞きした。東京帝国大学卒業後は東京・京都・九州の帝大ほか多くの大学に出講し、宗教学概論・宗教史概論・日本古代宗教、神道概論・神道史・神祇史・神道思想史等を担当した。また東京帝大の「神道講座」では神道の基本観念、神道思想の展開、古代神道の研究、古典の神道思想、神道史演習（万葉・書紀）・祭礼の研究等を担当した。これらからその学問が、宗教学を踏まえ、古典・文献に拠り、神道を日本の宗教現象として幅広く捉え、その本質の究明に向けられたものであることが知られる。

そして昭和一一年から「本邦農耕儀礼の宗教民族学的研究」のテーマで有栖川宮記念奨学金を受け、それまでの文献主体からフィールド・ワークに従事したことが、村落祭祀（ムラのカミ・宮座・祭祀者〈当屋・神主〉等）の分析を通じて日本社会の実態・特質の解明へと向う画期となった。

昭和一一年、母館の講師を嘱託され、一三年には教授として赴任。神道科主任として神社調査部・神道研究室を開設し、『神道研究』の刊行等精力的に研究活動を展開した。そして一五年に文部省所管の官立神宮皇學館大學となるに際して尽力した。

神宮皇學館大學における神道学の内容・理念は、昭和一八年文部省に提出した「学部学科内容説明書」の「神道学」の項で知ることができる。これは氏の考えを踏まえる。神道学は神道の根本・理論・実際等を研究する学問で、神祇（祭祀）と神道そのものの研究との二方面があり、その研究の要点は神道の意義、根本精神、神道思想の本質・特色、神道と祭祀・道徳・政治・国民生活との関係等にあり、それらを理論的・歴史的の二方面から探求する。氏は、神道学・神道概論・神道史・日本思想史等主たる科目を担当し、研究と教育に尽力した。

歿後、蔵書・資料類は同大学神道研究所へ寄贈され、毎文社文庫と称し、その学問・研究の全体像、具体的内容が知りえる。

氏の神道論は、日本の歴史・民族とともにあった祭祀・信仰が、他の宗教との歴史的交渉過程で自覚・反省、意識化されたものであり、そして日本社会の基盤にある集団的精神生活の根底を構造化するものとして神道を捉えた。このことは、「原田学・原田理論は、日本民族＝文化複合（コムプレックス）の自己認識の学であるといってよいであろう」（住谷一彦氏）と評される由縁である。

神道研究所教授　牟禮　仁

「雅」がよさこい全国大会で優秀賞

高知城前で記念撮影する「雅」のメンバーとその関係者。

本学のよさこい部「雅」が八月十二日に高知県で開かれた二〇〇九よさこい全国大会において初出場ながら優秀賞「彩」を受賞した。同大会の開催は今年で十一回目。全国から参加した四十六チームのうち、わずか五つしかない優秀賞に選ばれる快挙だ。

「仲間の最高の笑顔が見たいという思いの丈をぶつけて踊りました」と七十五名のメンバーを率いてきた原田みさきさん。〈キレがあって潔い〉との選評に副代表の赤沢善哉さんは「振付けや歌詞などは自分たちで考えたもの。それが認められてうれしい」と喜びを語る。

今年で創設七年目を迎える「雅」。原田さんは初代以来の女性代表だ。強いリーダーシップで、先輩たちが守ってきた雅をさらに飛躍させるため、〝愛し愛される雅〟をモットーにして、部員をまとめてきた。「踊りが好き、仲間が好き……どんな気持ちであれ、心に抱いた想いを全力で伝えることが大事」と原田さん。続いて、「わたしたちは種を蒔いただけ。あとは後輩たちが自分たちのカラーで芽を出してくれるはず」と優しい眼差しで話す。

年を追うごとに進化している「雅」。来年はどんな演舞が見られるのか、楽しみだ。

代表の原田さん(左)と副代表の赤沢さん。

コミュニケーション学科開設十周年記念
ホームカミングデーを開催

十一月一日、コミュニケーション学科では学科開設十周年を記念して、初のホームカミングデー(卒業生が母校へ帰る日)を実施した。当日の日曜日は倉陵祭の初日でもあり、秋に華やぐ倉田山にいっそうの彩りを添えることとなった。

午前中のコミュニケーション学会開催のあと、昼頃から多くの卒業生が顔を見せはじめ、午後一時よりメインイベントの卒業生・在学生交流会がスタート。「一般企業・公務員」と「英語教員」の部の二会場に分かれ、それぞれの仕事体験や就職へのアドバイスなどを語り合った。合計七十九名が参加して交わされた「生きたことば」は、何よりも貴重なものであり、在学生のみならず、卒業生同士の交流としても意義深い時間であった。

記念パーティでの一コマ。

この後、夕方から会場を二見のホテル清海に移し、記念パーティを開催。飛び入りの参加者もまじえ、出席者の総計は八十九名に達した。同期生がじっくりと旧交をあたため、先輩・後輩、教員・卒業生が交流し合う良い機会となった。

仕事の忙しい合間をぬってわずかな時間ながら顔を出してくれた人もおり、約四百名の卒業生のうち百名強が参加という、大成功のホームカミングデーであった。

なお、当日は十月二十二日に刊行された十周年記念本『コミュニケーションの風景』が卒業生に配布された。学科での勉強や研究活動、思い出、仕事体験、コミュニケーション力などについて全期・全学年・全教員が筆をとって記した内容は、十周年にふさわしい記念出版として好評であった。これは同時に、在学生が本を通じて「先輩から学ぶ」試みでもあり、在学生には事前に本書を配布している。

人と人との「交流」は、コミュニケーション学科のキーワード。今後もさらに工夫を加え、同様の試みを継続していく計画である。

秋恒例の
高校生英語スピーチコンテストを開催

十月二十五日、コミュニケーション学科主催による第十回高校生英語スピーチコンテストが開催された。今年は三重県内十七の高校より三十七名が参加した。発表終了後には第十回記念として、日本福祉大学准教授の中西哲彦氏による講演会「もっと語れる人になる」が行われ、参加者は効果的な英語の学習法について、新たに学んだようであった。

優勝した水谷さん(左から4番目)。

通常、スピーチコンテストは自作の英文によるスピーチを発表するが、本コンテストはより多くの高校生に気軽に参加してもらえるよう、そして何よりも良質の英文の暗記は英語学習の基礎となるという理由から暗唱を基本としている。今年は、例年通り教科書からの引用のほか、オバマ米大統領の就任演説を題材にする参加者が目立った。

厳正なる審査の結果、シェイクスピアの「ハムレット」の一部を披露した水谷帆乃加(ほのか)さん(暁高校二年)が優勝した。水谷さんはコンテスト終了後、「この一週間は特に集中的に練習した。台詞の抑揚に苦労したが、本番はうまく感情移入ができたように思う」と喜びの感想を述べた。なお、第二位に岸田華奈さん(メリノール女子学院高校二年)、第三位には細田あやさん(久居高校三年)が入った。

リレーエッセイ　私の学生時代

思索の道をゆっくり歩く

神道学科教授　河野(かわの)　訓(さとし)
東京大学大学院出身

晩秋の本郷キャンパスは正門を入ると色づいた銀杏並木の向こうに安田講堂が頭を出している。私の学んだ印度哲学印度文学研究室は向かって右側の法文二号館三階にあった。インド哲学や仏教関係の文献類が「どうだ、読めるか」という顔をして書棚に並んでいた。

大学に入学した頃は漠然と哲学を学びたいと思っていた。アリストテレスの『形而上学』を読んだのが一年の頃である。高校時代の漢文の先生の影響で中国哲学にも魅かれるものがあった。『老子』、『荘子』を繰り返し読んで自らに問いかけていた。『論語』はいつも枕元にあった。ただ、専門を選択する二回生のときに日本を深く知るには仏教の理解が不可欠だと知って仏教学を学ぼうと印度哲学印度文学科に進学することにした。

この頃読んだ本が中村元の『東洋人の思惟方法』で、丹念にノートを取りながら読み通した。インド人と中国人と日本人の考え方の違いに特に興味がわいた。この書の日本篇は神道よりも仏教をベースにした日本人論である。自分の研究のテーマは中国仏教に決めた。自分の学びたかった中国の諸思想と仏教の接点である。当時は今と違って文献を探すにもパソコンでの検索など考えられなかった。一頁一頁めくりながらお目当ての文章を探したものである。格闘の末見つけ出しても意味のわからないことが多くて困ってしまった。

講義の合間によく西洋美術館に出かけた。ゆるやかな坂を下って東側の池之端門を出た。道路を隔てて不忍池があり、近くには無縁坂もあってこのあたりは『雁』の舞台である。上野の丘を登りかえして幾つもあるミュージアムのうち、西洋美術館に入る。お目当てはモネの睡蓮である。その前は座れるようになっていてゆったりと名画が眺められた。

歩くのはゆっくり。ゆっくり歩けば、そこに思索が生まれてくる。齷齪(あくせく)としていては哲学は生まれない。ゆったりと生きたい。いまもそのまま気持ちに変わりはない。しかし、走り回ってばかりで、原稿の締め切りに追いまわされている今日この頃である。

悩める学生をサポート
学生支援センターを設置

昨年の教育開発センターに引き続いて、十月に学生支援センターが開設された。すでに設置されている保健室、学生相談室を取り込み、学習支援室、学外機関との連携を視野に入れながら進めていくことになっている。

近年、学生の多様化が進み、種々の悩みを抱えながら、その解決策が定まらない事例が増えている。また、彼らは学びたくても様々な要因が妨げとなり正常な学園生活が送れない状態にもある。

多くは授業の欠席や学力不振、人間関係の不和やトラブルといった形で表面化する。本学ではこれまでクラス担任をはじめ指導教員、ゼミ別指導教員やクラブ・研究会などを通じて学生と関わる機会を設けてきた。また、萼の会を通じて保護者との連携も深めてきた。しかし、それらは主として個人の個性や力量に託されてきたのであった。そこで、こうした制度を継承しながらも大学全体で組織的な指導体制を構築し、機能させる必要に迫られていたのである。

学生支援センターは平成二十三年四月の学舎統合時により本格的な運用を開始し、設置検討中のボランティアセンター(ピアサポートを含む)を含めて指導体制をさらに強化していく予定だ。

本学に入学を許された学生が健やかに学べる環境とサポート体制を確立し、卒業までを保障する制度を現状に即して構築してゆくのが本学に求められる喫緊にして、重要な責務である。

第12回 皇名祭～誇り～

10月23日㈮～25日㈰の３日間、名張キャンパスにて皇名祭が開催されました。今回で12回目となる皇名祭では意欲的・画期的な企画が多数催され、学生だけでなく様々な地域の方々が来場し、老若男女問わず楽しむことのできる充実した３日間となりました。今回は、ほんの一部ですが、皇名祭のリポートを実行委員自ら報告します!!

10/23㈮

●祭典

皇名祭を開催するにあたり、祭典が執り行われました。当日は秋晴れのもと、実行委員72名全員、清々しい気持ちで祭典に臨むことができ、３日間の皇名祭の無事を願いました。

●体育大会

皇名祭初日のイベントとして開催。クラス対抗と個人種目の２つに分かれ、リレーや大縄、100m・400m 競争などを実施しました。どの種目も大接戦!! 特にクラス対抗リレーでは何と４年生を抑えて１年生が逃げ切りフィニッシュするサプライズもあり、笑いあり涙ありの体育大会となりました。

●ステージバンド

皇名祭の定番といえば学生ライブ♪ 今回は前回も出場しているベテランバンドが数多く見られました。もちろんベテランだけでなく、１年生の初々しいバンドも登場。３日間の皇名祭を盛り上げてくれました。

10/24㈯

●あつまれ!! 名張の忍者たち

伊賀・名張地域といえば〈忍者〉のふるさと。皆で忍者装束をまとい、子どもから大人まで、辺り一帯忍者で埋め尽くそうという企画が行われました。友人同士や親子連れなど大勢の方が集まり、最後に皆で記念撮影を行いました。

●キャップDEアート

ペットボトルキャップを使って１つの巨大な絵を作るキャップDEアート。地域の方々の協力もあって目標の50万個を集めることができました。キャップを使って描いた皇名祭のシンボルマークを３階から見下ろすと圧巻そのもの! このキャップは解体後、学生支援センターを通して寄付され、ワクチンとなって諸外国に送られます。

10/24㈯

●お笑いライブ

松山千春のものまねで有名なこんちはる氏のオンステージからスタート。歌唱力は言うまでもなく、笑いあふれる楽しいトーク、キラキラ輝く衣装など、会場を大いに沸かせてくれました。その後ステージは続き、四次元ナイフ・やなせふなかおかの２組の漫才で会場は爆笑の渦! それを取り仕切る島田まさし氏の流暢で面白い司会にも花が咲き、とても盛りあがったお笑いライブとなりました。

10/25㈰

●地域探訪公開プレゼンテーション

１年生がこの７月に実際に名張市を見て、歩いて、感じたことを報告する発表会が行われました。名張市は新旧の町並みが混在する不思議な町。歴史を感じる一方で、福祉の視点から見ると歩道がとても狭かったり、車椅子はどこを行けば良いのだろう？と感じることも。今回のプレゼンには地域の方々も数多く出席いただき、とても有意義な時間となりました。

●カラオケ大会決勝

１次・２次予選を勝ち抜いた、８組のつわものが皇名祭の最後を大いに盛り上げてくれました。歌唱力はもちろんパフォーマンス等も審査対象になり、決勝まで勝ち残っただけあってどの出場者も個性的。生き生きとした笑顔でのステージとなりました。

〈皇名祭を終えて〉

●岩名倫子（みちこ）（２年生）

今回初めて実行委員として挑戦した皇名祭。私はキャップアートを作るチャレンジ部署になりましたが、皆の団結もあって半年という短い期間に50万個のペットボトルキャップを集め、多くの来場者の方に見ていただけました。この皇名祭の実行委員に入ったことが私にとっての誇りです!

●川北広太郎（１年生）

企画部署のリーダーとしてオバケ屋敷の「恐怖のラビリンス」など12を企画。いずれも好評を得ることができホントに嬉しかったです。インフルエンザの流行などたくさんのハプニングもありましたが、無事終えることができたのは仲間の支えがあったからこそ。本当に充実した半年間でした。

●加古雅基（２年生）

私は製作部署に所属し、巨大なシンボルマークの作成などを担当しました。あまりの大きさに当日までに完成できるか不安でしたが、メンバーの意思の強さや４年生の先輩方の協力が私の不安を拭い去ってくれました。後夜祭を終えた時〈無事に終えてよかった〉という達成感が込み上げました。

●澤田なつき（３年生）

「挑戦」をモットーにこれまでの皇名祭とは違う大きな企画に挑んだ分、苦難の道のりでした。でも、逆境に立たされたからこそメンバーが一丸となって協力することができ、チームワークや繋がりが強くなったように思います。72人のみんな、本当にありがとう!!

クローズアップゼミ
研究室探訪4

国文学科准教授
上小倉一志ゼミ

五感を使い、表現できる力を

私は書道を研究テーマとしています。当然、書道の場合は文字を書いて作品として表現することが最大の目的になるわけですが、ゼミでは書体の変遷や各時代における書風の違い、一世を風靡してきた能書家たちと彼らに影響を与えた数多くの文字資料などについて研究しています。

書道の場合、その歴史は紀元前15世紀頃までさかのぼります。それから現代に至るまで3000年以上の間、基本的なシステムを変えずに使われ続けていることが漢字の驚くべきところです。加えて、様々な形に文字を変化させながら同時にそれを表現することを確立させた点も他には無い特徴となっているわけです。学生にとってはあつかう時代の範囲も広く、各時代や地域における文化的な背景も理解しなくてはならないのはかなり大変なこと。しかし、書の歴史や漢字の変遷を学習するだけではなく、そこで生きていた人々の息吹を文字から感じ取る事が出来る、それが書道ゼミの最大の魅力であり、実作する上でもその知識が生きてくるのです。

また、書の周辺としての文房四宝にも興味を持ってもらうためにゼミ旅行などで筆作りを体験したり、墨や硯の工房を見学したりもしています。書道は理屈を学習するだけでも文字を書くための技術を修得するだけでも本当に熟達することは出来ません。自分の持てる五感の全てであらゆる物を感じ取り吸収し、それを表現するだけの技術を身につけることが出来てこそ、本当に書道を学んだと言えるのではないでしょうか。書道の奥行きの深さを知ってもらえることと思います。

学生責任編集ページ　学生記者募集!……興味のある人は総務課まで!　KODAISM

第48回 倉陵祭～煌～

11月1日(日)～3日(祝)に伊勢キャンパスにて行われた倉陵祭。テーマの「煌」には学生一人ひとりの放つ光が大きく広がっていってほしいとの想いが込められています。48回目となる今年は初めての催しも多数企画され、子どもから大人まで幅広く楽しんでいただけたはず。一部ですが、写真とコメントで3日間の様子を紹介します。

11/1(日)－3(祝)

●生命のメッセージ展

事故や事件などで理不尽に生命を奪われた犠牲者が主役のアート展。遺品の靴や等身大の人型パネル、遺族の言葉などを通して「生命の重み」を伝えています。ある学生は「気軽に車を運転できないと思った」、20代のOLは「今日一日を大切に生きなければ」とそれぞれに感想を話していました。

●スターラリー

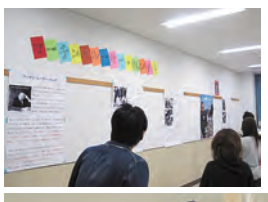
スターラリーは今年初めて企画された催し。展示や模擬店など校内のあちこちに置かれた〈スター〉を探すゲームで、5つ見つけると「星にまつわるお菓子」がもらえます。スターを探していると普段見ないような展示や企画にも足を運ぶことができ、発見がいろいろ。参加者は知らず知らずのうちにいろんな場所をまわっているようでした。

●模擬店

祭典中、部・同好会(サークル)や有志が模擬店を出店し、倉陵祭を盛り上げました。メニューは焼きそば、たこ焼き、フランクフルト、クレープ、ちゃんこ鍋などおいしそうなものばかり。作業をしている学生たちも本当に楽しそうで、笑顔が絶えない3日間を過ごしていました。

●展示

各教室では主に部活動、サークル活動のさまざまな展示が行われていました。とりわけ、書道部、華道部などはどれも本格的で目を引きました。見るだけでなく体験できるものが用意されているところもあり、美術部では切り絵体験が人気を集めていました。



●おばけ屋敷

1号館1階の112・113教室で開催された「おばけ屋敷」。40分～1時間待ちという大盛況ぶりで、子どもから大人までさまざまな年齢の方が楽しんでいました。

●チャリティーバザー

たくさんのバザー品があり選び応えのある内容。収益金は伊勢市社会福祉協議会に寄付されました。

11/1(日)－3(祝)

●DLS(ドリーム・ライヴ・ステージ)

記念講堂前の特設ステージでは3日間を通してさまざまなイベントが行われました。とくに盛り上がっていたのが「借り人競争」。カードを引き、そのカードに書かれた通りの異性を探して景品をもらおうという内容で、「マフラーをした女の子をさがせ!」「津出身の男の子を探せ!」といったお題が出される中、参加者は懸命に探し回っていました。ほかにもアコースティックライブ、ミスコン、ビンゴ大会など様々な企画が行われ、みんなを楽しませてくれました。

11/1(日)

●教育エキスポ

教育エキスポでは教育学科の各研究室(ゼミ)で行われている研究の発表や、研究旅行の内容をポスターでわかりやすく発表します。テーマは「武士道～Bushi Way～」「笑いの瞬間～その時芸人たちは～」「算数マジック」など多種多様。教育学科に興味のある方はぜひ来年参加してください。

●名張展

行灯やきり絵の展示、ミサンガなどのオリジナルグッズが販売されていました。名張キャンパスのみなさんと交流を深めるよい機会になりました。

11/2(月)

●樽神輿

学年学科別に作った樽神輿が二日目の朝、伊勢市内を巡幸しました。練り歩く道のりは学校と外宮を結ぶ御幸道路。学生たちが「ワッショイ! ワッショイ!」と声を張り上げて担ぐ姿に、沿道の人たちは声援を送っていました。

11/3(祝)

●アーティストライブ

今年は「GO! GO! 7188」を招いてのアーティストライブ。学生用の引換券は即日完売。一般の方々の引換券も長蛇の列ができていて、ステージである記念講堂内は超満員という盛り上がりでした。様々なヒット曲をリリースしている彼女たちの演奏は情熱的で、口ずさむファンの姿もあちらこちらで見られました。白熱したライブに観客は大満足の様子でした。

●後夜祭

倉陵祭の最後の締めを飾る盛大な夜の祭り、後夜祭。ファイヤーストームをはじめ、ファイヤーダンス、火文字、打上げ花火といった見るものを魅了するものばかり。今年のテーマである「煌」を見事に表現していたと思います。

〈倉陵祭を終えて〉

●松平春奈(教育学科3年)

今回、実行委員会の広報局長を担当しました。倉陵祭までの半年間、準備を進めていく中でたくさんの試練がありましたが、無事終えることができた時の達成感はとても素晴らしいものでした。実行委員会のみんなをはじめ、協力してくださった多くの方々に感謝の気持ちでいっぱいです。この気持ちを忘れず、今後に活かしていきます。

●木下周平(国文学科3年)

年々勢いが増していく皇學館大学の学園祭。皆さんが本当に生き生きとした表情で3日間を過ごしていたように見えます。僕自身も樽御輿に参加したり、たこ焼きを販売したりと、様々な行事に取り組めた3日間でした。皇學館大学の学生は大人しい印象があるそうですが、活気に満ちた倉陵祭の様子からそういう風には全く見えないなぁと実感しました。

●髙木直哉(教育学科3年)

倉陵祭は大学生活の中で最も学生が輝ける催しだと実感しました。そんな倉陵祭に関われたことをとても嬉しく思います。

●松葉真未(なおみ)(教育学科3年)

「来た人を楽しませたい」という気持ちがどの企画のメンバーからも伝わってきて、みんなの『煌』を感じることができました。とても楽しかったです!

皇高NEWS

笑いと感動に包まれた皇高祭・体育大会

九月十七日・十八日の両日、「一人ひとりが主役に」をテーマに皇學館皇高祭が開催された。一日目の会場となった伊勢市観光文化会館では吹奏楽部の軽快な演奏や漫画家・さかもと未明さんの講演、MEGARYUによるレゲエ演奏などが行われ、生徒の興奮を誘った。さかもと未明さんは「どん底からの脱出法」との演題で自身の高校時代の体験を語り、困難な状況に置かれていたり、悩みを抱えたりしている生徒に訴えかける講演を行った。講演後は質問を受けるなど生徒とも交流。非常に良い印象を持たれたようで、すぐに自身のブログで「もし高校生活に戻れるのなら、わたし通いたいよ、皇學館」という言葉で本校が紹介されていた。

本校にて催された二日目は各クラスがクラス展示や模擬店にクラスの団結力をいかんなく発揮。力作を披露した。また、書道部・華道部の作品展示、家庭部の作品販売、茶道部によるお手前のサービスなどが学園祭に一層の華やかさを添えた。体育館では有志によるバンド演奏があり、多くの学生たちがその演奏を楽しみ、最後に校友会主催の全校生徒参加のマスクイズゲームが行われ皇高祭を無事終了した。

上／さかもと未明さん講演。
下／有志のバンド演奏。

また九月二十五日には秋晴れの下、体育大会が実施された。歓声と失笑（特に教職員出場の競技では）に包まれる中、クラスの名誉をかけ、個人競技・全体競技に全力を尽くす生徒たちの姿が見られた。総合成績は以下の通り。

第一位　一年一組(55点)
第二位　三年四組(51点)
第三位　二年九組(50点)

見よ！見事に揃ったジャンプ!!

少年男子共通棒高跳
国体で田中僚君が二位入賞の快挙

九月二十六日～十月六日にかけ新潟県において、第六十四回国民体育大会（通称「トキめき新潟国体」）が開催され、本校からも三重県代表メンバーとして陸上部・田中僚君、及び男子バレー部七名、銃剣道部三名がチームメンバーとして参加。県勢の活躍がいくぶん振るわなかった中、田中君が少年男子共通棒高跳で二位入賞の快挙を成し遂げた。また、柔剣道も少年男子の部で八位に入賞し、三重県の成績に大いに貢献した。

田中僚君が自己ベストの跳躍！

四泊五日の修学旅行で北海道を満喫

北方領土〝四島のかけ橋〟。

高校生活最大のイベントである修学旅行。今年は四泊五日、北海道へ以下の日程で行われた。

第一日目　中部国際空港発・摩周湖・網走温泉郷泊
第二日目　納沙布岬・国後展望閣・知床峠・ウトロ泊
第三日目　層雲峡・旭山動物園・美瑛・白金温泉泊
第四日目　富良野・小樽・札幌藻岩山・札幌市内泊
第五日目　札幌市内・北海道神宮・中部国際空港着

出発前にインフルエンザの影響で学級閉鎖の組が出るなど実施が危ぶまれたり、予定されていた帰着日に台風18号が本州に上陸するなど無事に戻ってこれるのかハラハラどきどきの五日間であったが、終わってみればインフルエンザの感染者はゼロ。帰路もパイロットの到着が遅れ空港で二時間ほど待機した以外は台風の間隙を縫う奇跡的なフライトでほぼ予定通りに帰着。北海道滞在中も好天が続くなど、好条件に恵まれた旅行となった。

皇中NEWS

接戦相次ぐ、一年生も大健闘
第三十回　体育大会

九月二十日に第三十回体育大会が開催された。晴天の下、毎年恒例の入場行進は整然としており、その場にいた全員の気持ちまで清々しくさせた。

競技は短距離走から始まり、バンブーレースでは一年生のクラスが活躍。チャレンジャー・ザ・ギネス（大縄跳び）では各クラスの掛け声がグラウンドに響き渡った。保護者レースにも多数参加をいただき、教員と共に組んだ二人三脚は一層盛り上がった。午前の部が終了してみれば一年生のクラスが一位という大健闘。それに負けじと、午後の部では上級生が猛追。クラス対抗騎馬戦では上級生になるほど勢いが増し、生徒たちの興奮が伝わってきた。綱引きでは後方でクラス旗を懸命に振り応援するクラスメイトの姿が選手の力をより引き出した。最後の種目・二十人リレーではこの結果によって優勝・準優勝が決まるという接戦。優勝は三年B組、準優勝は三年A組とわかると、喜びや悔しさで泣いている生徒の姿が見られた。

トラップレース（ハードル）。

クラス対抗騎馬戦。

どの競技においても生徒が一生懸命取り組む姿は変わらず、各学年でそれぞれの工夫がなされていた。準備、審判、召集、記録の係りなど生徒の手でしっかりプログラムが進められているように感じられた。閉会式が終了すると各クラスでの記念撮影が運動場で行われた。生徒たちの表情は満足感いっぱいの笑顔で輝いていた。

佳節にふさわしい盛り上がり
第三十回　皇中祭

十一月七日、八日に開催された皇中祭。インフルエンザによる学年閉鎖など準備が思うように進まないこともあったが、どのクラスも協力し当日を迎えることができた。

今年は三十周年という佳節ということもあり、例年とは違い大学の記念講堂にて厳粛な雰囲気の中、祭典が執り行われた。生徒から募集し決まったテーマは「嵐を巻き起こせ！　みんなで繋いだ三十年」。開会式での「楽しい嵐を巻き起こしましょう」の言葉と共に全員の気持ちは合唱コンクールへと向かった。どのクラスの生徒もステージに上がり準備を終え緞帳（どんちょう）が上がると緊張が高まっていくのがわかった。その心地よい緊張感はホール全体に響きわたり、再び緞帳が下りるとステージの裏ではホッと安心する姿や達成感から涙ぐむ姿、友達同士で抱き合う姿が見られた。一年生は元気いっぱいの歌声を、二年生は想いのこもった歌声を、三年生は上級生としての貫禄ある歌声を披露していた。その後、中学校校舎のセミナーホールで佐藤浩先生（能力開発会社　株式会社シンパシィ・ユニオン代表取締役社長）に人間の潜在能力の可能性を教えていただいた。

１年Ａ組のクラス展示（エコ・縁日）。

合唱コンクール（３年Ａ組）。

二日目、午前に皇中祭のメインであるクラス展示をはじめクラブ発表、総合学習展示、花販売、保護者会バザー、軽食販売、お茶会などが行われた。サンラウンジでは皇中祭実行委員が花販売や募金活動を行っており、花も十一時には完売となった。理科室と美術室では保護者の方々の協力による軽食販売、バザーは例年通り皇中祭の雰囲気をより高めた。午後は、記念講堂でお笑いの超新塾さんと歌手の甲斐名都さんによるアトラクションが三年に一度の記念行事として行われた。

閉会式では、この二日間の合唱コンクールとクラス展示の結果発表が行われた。合唱コンクールでは、三年Ａ・Ｂ組が同点優勝。生徒は驚き、その後仲良く優勝できたことを喜ぶシーンも見られた。クラス展示では優勝が一年Ａ組、準優勝が三年Ｂ組と発表されると、会場は今までにないくらい盛り上がりを見せた。

どのイベントでも会場が一体となって楽しめたこの二日間。生徒は翌日も嬉しそうに思い出を語っていた。

秋晴れのなか初穂曳に参加

奉曳車が外宮の神域へ曳きこまれると、曳き手たちから歓声や拍手が起こった。

晴天に恵まれた十月十五日、伊勢市で「初穂曳」が行われ、本学から学生や教職員含む約七百名が参加した。これは一年生の必修科目である伊勢学「神嘗祭と初穂曳」の体験型学外授業の一環として行われるもので、皇學館大学としての参加は今年で三年目になる。

「初穂曳」とは神様に新穀を捧げ、五穀の豊穣に感謝する神宮の「神嘗祭」にあたり、その年に収穫された初穂を納めるもの。二十年に一度の「お木曳行事」の技術を継承していく意味も込め実施される祭りだ。

本学は神宮奉仕会青年部および北浜連合奉曳団の協力を受け、四台ある奉曳車の中の一番車を担当。出発の頃は緊張した様子で綱を握っていた学生らも目的地の外宮に近づくにつれ次第に慣れたようで、左右の列が互いに押し合う「練り」も盛り上がりをみせた。十一時十五分には車が無事外宮へ到着。新穀を無事納め、全員で正宮参拝へ向かった。

初めて参加した峯望（みねのぞみ）さん（国史学科一年）は「最初は大人しかったが、段段みんなの声も出てきて、楽しかった」と晴れ晴れと答えてくれた。また木遣りを担当した皇學館奉曳会の関口諒子さん（神道学科二年）は「去年は曳き手だったので、今年は一年生をいかに盛り上げるかを工夫した」という。伊勢の地の伝統ある行事に参加することで、参加した学生たちは伊勢と神宮の繋がりや市民との交流を改めて体感したようだった。

奉納する初穂を手にする峯さん。

天皇陛下御即位二十年奉祝提灯（ちょうちん）行列に参加

各地で天皇陛下の御即位二十年奉祝行事が行われた十一月十二日、伊勢市でも伊勢商工会議所遷宮観光委員会と伊勢神宮奉仕会が主管して、総勢二千名による奉祝提灯行列が行われた。

本学からは、スクールカラーである紫色の法被を着た教職員・学生約三百五十名が参加し、宇治浦田街路広場からおはらい町通りを抜け、十一月三日に渡始式を終えたばかりの宇治橋前に着くと万歳三唱。紅白の提灯を揺らしながら内宮を夜間参拝した。参加した山口麻衣さん（国文学科三年）は、「厳粛かつ優麗な行列でした。陛下にはいつまでもこの国を見守っていただきたいです。十年後、二十年後のお祝いにも参加したいです」と感慨深げに感想を述べた。

厳かな雰囲気に包まれた提灯行列。

◆創立百三十周年・再興五十周年記念事業
◆皇學館高等学校創立五十周年・皇學館中学校創立三十五周年記念事業　寄付者芳名

学校法人皇學館の周年記念事業募金につきまして、ご協力いただいた方々に心より厚く御礼申し上げると同時に芳名を掲載させていただきます。掲載は十月三十一日までの到着分とさせていただきます。

創立130周年・再興50周年記念事業寄付金 進捗状況

平成21年10月31日現在

区分	申込件数	申込金額(円)	納入金額(円)
宗教界	634	776,147,000	743,807,000
館友	715	78,494,000	74,959,000
篤志家	44	31,805,000	31,685,000
萼の会	1,859	80,113,000	80,113,000
企業	103	61,375,000	60,615,000
本法人関係	247	57,632,000	56,677,000
合計	3,602	1,085,566,000	1,047,856,000

篤志・その他

三重県
六十万円　西山嘉代子様

萼の会（保護者の会）

博士前期課程　国史学専攻
三万円　大友　重幸様

文学部神道学科
三万円　浅原　稔様
三万円　足野　吉弘様
三万円　小林　司様
三万円　吉見　英和様

文学部国文学科
三万円　山下　茂恭様

文学部国史学科
三万円　泉　秀昧様
三万円　大友　重幸様
三万円　西浦　伸幸様

文学部コミュニケーション学科
三万円　浦野　功様

教育学部教育学科
三万円　大西　哲雄様

同窓会会員

三重県
一万円　中西　忍様

皇學館高等学校創立50周年・皇學館中学校創立35周年記念事業寄付金 進捗状況

平成21年10月31日現在

区分	申込件数	申込金額(円)	納入金額(円)
宗教界	2	150,000	150,000
企業	9	1,090,000	1,000,000
一般（旧教職員・篤志家等）	15	415,000	415,000
同窓会会員	118	2,428,000	2,428,000
後援会賛助会員	54	880,000	880,000
本法人関係	123	3,645,000	3,530,000
合計	321	8,608,000	8,403,000

個人情報保護に関する法律の施行に伴い、ご芳名・金額等の掲載をご希望されない方々につきましては、別記とさせていただきました。
◆萼の会／14名

皇學館大学創立130周年・再興50周年 ロゴマーク募集

本学は明治15年に創立、また戦後の廃学を経て昭和37年に再興されてから、平成24年で創立130周年・再興50周年を迎えます。この機会に、より本学に親しみを持っていただくために、学園の教職員、学生、生徒、保護者並びに館友等本学関係者を対象に「創立130周年・再興50周年ロゴマーク」を募集いたします。

創立100周年の記念ロゴマーク

募集期間は**平成22年１月～３月頃**を予定しております。詳しくはホームページまたは次号（24号）をご覧ください。多数のご応募をお待ち申し上げております。

平成21年度 地域福祉文化研究所シンポジウム

現代の子どもに必要な動きを考える
―子どものからだの変化から―

現代の子どもの状況を理解し、子どもの育成には何が必要なのかを問い直し、どのような取り組みが出来るか――。スポーツを通してご活躍の方々を迎え、皆さまとともに考えたいと思います。教育関係者、地域の指導者、またそれらを志す方々、ぜひご参加ください。

日時●**平成22年1月7日(木)** 13:00～16:20（開場12:30）　300名収容 参加費無料

会場●**皇學館大学　名張キャンパス　大講義室**

内容●【第１部】基調講演……13:00～14:10
「子どもの体力変化と脱力を意識した動きの開発」
講師：脇田裕久 氏　三重大学教育学部　教授

【第２部】パネルディスカッション……14:20～16:20
パネリスト：水本裕貴 氏　京都サンガF.C.
山中　潔 氏　千葉ロッテマリーンズバッテリーコーチ
叶　俊文　本学社会福祉学部教授　専門分野：体育心理学
コメンテーター：脇田裕久 氏　三重大学教育学部教授　専門分野：運動生理学

主催：皇學館大学 社会福祉学部 地域福祉文化研究所
後援：三重県教育委員会、名張市、名張市教育委員会

OB・OG訪問　先輩、お元気ですか

松嶋（まつしま）節（せつ）氏
小説家・エッセイスト

国文学科第六期（昭和四十六年三月）卒◆高校教諭として勤める傍ら創作活動に携わる。昭和六十三年度三重県文学新人賞や第四回マリン文学地方文学賞、平成七年には『アアア・ア・ア』が第五回小谷剛文学賞を受賞し、洒脱な作風と文体が注目を集める。小説の創作と普及活動への貢献が認められ、平成十七年度三重県文化奨励賞を受賞。今後の活躍が一層期待される。

学生時代を振り返ると、良い先生に恵まれたと思いますね。国語の教員生活を三十八年続けてこられたのも恩師に倣うといいますか、教師としてあるべき姿を多くの先生たちが身をもって示してくださったからだと感じています。

教育には技術と知識が必要ですが、どちらも根っこで支えるのは〝国語・国文学が好き〟という想い。皇學館ではこの芯の部分を育んでいただいた気がしますね。

小説を書く上でも影響を受けましたよ。心理描写より細かい情景描写をしなさいという北川伊男（よしお）先生の言葉は今も心に留めています。小谷剛文学賞を受賞した『アアア・ア・ア』も学生時分に聞いた祝詞の〈繰り返す〉手法をヒントに思い浮かんだタイトルなんです。

今の学生には大いに悩め、と言いたいですね。平成十八年から一年間、日本語教員として中国へ派遣されましたが、中国の学生たちはみな勤勉で向上心に溢れていました。いろいろ悩みが多いのは、日本の学生も同じ。苦悩を知っている人は他人に対して優しくなれると思います。学生であるこの時期にしっかりと悩んで、自分の道を見つけてほしいですね。

学園祭に著名人が続々来学

浅野温子氏の語り舞台®

倉陵祭二日目である十一月二日、伊勢学舎記念講堂にて浅野温子氏による語り舞台®が開催された。浅野氏は平成十五年から語り舞台®『日本神話への誘い®』として全国の神社を舞台に独特に脚色した古事記を語っており、その一環として本学への来校が決定した。

当日は「天の岩屋戸にお隠れになった天照大御神～月読命の語れる」としてバイオリンの音色とともに迫力に満ちた声、鬼気迫るパフォーマンスで観客を魅了。神話の世界をみごとに演じ切っていた。

また、舞台後の質問コーナーで浅野氏は「このプロジェクトは伊勢神宮からスタートした。その時、皇學館の学生さんたちがわかりやすくて面白かったと言ってくれたことがとても心強く、続けていく上で励みになった」と話し、感謝の言葉を述べていた。

「天の岩屋戸にお隠れになった天照大御神～月読命の語れる」を熱演する浅野氏。　©オフィス・ジゴロ

不屈の男・輪島功一氏が講演

十月二十三～二十五日にかけて名張学舎で行われた皇名祭の三日目、大講義室では元プロボクサーの輪島功一氏による講演会「頑張りの人生」が開かれ、学生・一般を含む約二百名が聴講した。日本プロボクシングジム協会東日本協会会長を務める輪島さんは、プロデビューから三年後の一九七一年に世界タイトルに初挑戦で王座獲得、「かえる跳びアッパー」で一躍有名になった。世界タイトルを六度防衛し、二度のリターンマッチでベルトを奪還した経験を持ち〝不屈の男〟と呼ばれる。

講演の中で、輪島さんは若い頃に〝頑張る〟ことの大切さを強調しながら、世界チャンピオンになった時のエピソードなどを軽妙な語り口で紹介。参加者を巻きこみながらのユーモアある講演に、聴講者らは時折笑い声をあげながら聴き入っていた。

東儀秀樹氏・読響と雅楽部が夢の共演

倉陵祭の三日目となった十一月三日は折しも第六十二回神宮式年遷宮に先立って執り行われる宇治橋渡始式の日。その奉祝行事のひとつ、東儀秀樹氏のコンサートに本学雅楽部が共演させていただいた。内宮特設舞台での演奏を前にリハーサルのため東儀氏が祭式教室を訪問した。緊張する雅楽部メンバーに対し東儀氏は「私を意識しすぎると音がかたくなってしまう。肩の力を抜いて演奏しましょう」とアドバイス。本番では「越天楽幻想曲」「夕焼け小焼け」の二曲を共演し、荘厳な音色を響かせた。

また、読売日本交響楽団弦楽四重奏とも六日に伊勢河崎商人館で、七日には内宮神苑特設舞台で共演。「和洋の調べ」と題して「鎮守の里」「赤とんぼ」など三曲を奏でた。

幻想的な雰囲気に包まれた神苑。東儀氏の奏でる優美な調べに観客は聞き惚れていた。

「演奏する時は曲全体をイメージし、流れをつかもう」と東儀氏。「曲の部分ごとに気持ちの入り方が違ってはだめ」とアドバイスを受けた。

2カ月イベント情報

12月

5(土) 月例文化講座　伊勢学舎
中国の水銀をめぐる信仰―丹生神社と関連して―
◆松下道信 国文学科講師

学生支援GP　名張学舎
せんぱいトーク　各業界の状況など卒業生から就職に向けてのアドバイス

12(土) 名張学舎「週末あそび塾」　名張学舎
みんなで凧を作ろう!
◆田鍋鉄弥 氏（夢と技の伝承カーペンター）

13(日) 伊勢市まるごと博物館　神道博物館
家庭でできる文化財の取り扱い
◆岡田芳幸 神道博物館准教授・石川達也 同助手

17(木) 名張の地域文化を語る会　まちなか研究室事務室（名張）
名張の年末年始行事 ◆板井正斉 社会福祉学科講師

19(土) 月例文化講座　名張学舎
消費伝染病〝アフルエンザ〟
―この社会的な病気に必要な処方箋とは?―
◆山中優 社会福祉学科准教授

23(祝) ちょっとちょっと講義　まちなか研究室事務室（名張）
福祉用具の最先端 ―移動支援を中心に―
◆笠原正嗣 社会福祉学科准教授

1月

7(木) 地域福祉文化研究所シンポジウム　名張学舎
現代の子どもに必要な動きを考える
―子どものからだの変化から―
※詳しくは7面をご参照ください。

23(土) 皇-1GP　伊勢学舎
ビジネスプランコンテスト公開プレゼンテーション大会

月例文化講座　名張学舎
大自然がはぐくむ共生社会 ―見果てぬ夢 カナダ―
◆岩﨑利彦 社会福祉学科准教授

イベントの時間・申込方法等のお問合せは各学舎まで
伊勢学舎☎0596・22・0201㈹　名張学舎☎0595・61・3351㈹

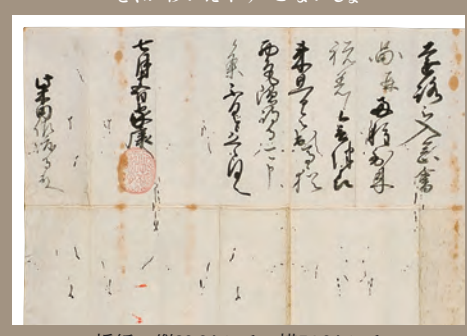
編集後記

◆大学にとって、秋は様々な行事が目白押しで、地域や社会に対して〝開かれた学校〟をアピールするには絶好の季節です。◆活気のある華やいだ季節でもありますが、その一方で今秋は各地で若い大学生の命が奪われる事件が相次ぎました。◆伊勢の倉陵祭では、理不尽に命を奪われた犠牲者の生きた証を伝える「生命のメッセージ展」が開催されていました。命の重み、残された人々の想い…、心に響きました。世の中の安寧を祈ります。◆今号は年内最終号になります。よいお年をお迎えください。【総務課】

皇學館ミュージアム

徳川家康 御内書

とくがわいえやす ごないしょ



折紙　縦36.6センチ×横54.0センチ

本学史料編纂所に寄贈された福富家伝来の古文書中の一点。慶長五年（一六〇〇）五月、徳川家康は上杉景勝を討つため諸大名に会津出陣を命じ、七月二日、自ら江戸城に到着した。本文書はそのような家康のもとに大友家臣と思しき柴田佐渡守が絵図と土産物を贈ったのに対し家康が礼を述べ、来る（七月）二十一日には会津に出馬する予定であることを告げたもの。ちなみにこの二日後、石田三成は毛利輝元を総大将に戴いて挙兵、八月一日には伏見城を落としたため、下野国小山にいた家康も兵を返し、九月一日には江戸を出発。十五日には両軍が関ヶ原で激突することとなる。大河ドラマ「天地人」の影響で、関ヶ原の戦いへといたる家康と上杉との確執が注目を集めている昨今、本学が誇る一品といえよう。

上杉との確執の一端うかがい知る

神道博物館長　岡野友彦

翻刻

遠路被入念、會
図並両種到来、
祝着候、会津表
来廿一日令出馬候、猶
西尾隠岐守可申
候条、不具候、恐々謹言、
七月十五日家康（朱印）
柴田佐渡守とのへ

平成22年度　学部・大学院・専攻科入試日程

試験種別				学部	出願期間（締切日必着）	試験日	合格発表	試験場
一般	前期		A方式3科目型	文 教育 現代日本社会	H22年 1月6日㈬～22日㈮	1月29日㈮ 1月30日㈯	2月12日㈮	伊勢　名古屋 名張　大阪 四日市　神戸 東京　福岡 浜松
			A方式2科目型					
		得意科目入試	B方式2科目型			1月31日㈰		
			B方式＋センター試験利用			〈B方式〉 1月31日㈰		
	後期		2科目型		2月12日㈮～23日㈫	2月27日㈯	3月4日㈭	伊勢　名古屋 名張　大阪

センター試験利用						
A	3科目型	教育・現代日本社会	1月6日㈬～15日㈮	個別学力検査等は行いません。	2月12日㈮	
	2科目型	文	1月6日㈬～22日㈮			
B	3科目型	教育・現代日本社会	2月12日㈮～23日㈫		3月4日㈭	
	2科目型	文				
C	3科目型	教育・現代日本社会	3月4日㈭～12日㈮		3月18日㈭	
	2科目型	文				

試験種別	学部	出願期間（締切日必着）	試験日	合格発表	会場
館友推薦（後期）	文・教・現代日本社会	3月4日㈭～12日㈮	3月15日㈪	3月18日㈭	伊勢

試験種別	学部	出願期間（締切日必着）	試験日	合格発表	会場
大学院 文学研究科	博士前期・修士（神・文・史・教）	2月12日㈮～25日㈭	3月4日㈭	3月5日㈮	伊勢
	博士後期（神・文・史）				
大学院 社会福祉学研究科	修士				名張

試験種別	学部	出願期間（締切日必着）	試験日	合格発表	会場
神道学専攻科	2次	1月25日㈪～2月8日㈪	2月15日㈪	2月16日㈫	伊勢

入試日程に関する詳細は、ホームページまたは募集要項をご覧ください。

皇學館大学 入学試験課　〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704　☎0596-22-6316 [E-mail]nyusi@kogakkan-u.ac.jp　http://www.kogakkan-u.ac.jp